

「イバラツタテンジュ」——許されない禍

テンジュ科

危険度：☆☆☆☆☆

生息数：☆☆☆☆☆

生態

イバラツタテンジュはフワリツタテンジュと並んでツタのみが確認されるテンジュ科の禍である。しかし接触による影響を限りなく減らしたフワリツタテンジュに対してこのイバラツタテンジュは接触による影響を限りなく増やしているという印象を受ける。ツタは硬く、また固く絡み合い、するどいトゲを持つ。もちろん実際に傷を負ったりはしないが、やはり近寄りがたい禍であることは確かである。

この禍は「罪」の概念を人間に与えていると考えられている。

解説

人間にとって「罪」という概念は単に「やってはいけないこと」を決めるだけでなく、全ての物事を「是」と「非」に分ける考え方、判断力の基礎となるものである。その基準は個人によってバラバラであるが、その差異を作るのも「何を非とするか」という「罪」の概念なのである。また「罪」の概念にはもう一つ大きな要素として、「許す」という概念も含まれている。そもそも「許す」とは単に「怒り」の対極にあるものではなく、「罪」の対極にあるものである。怒りというものが「罪だから怒る」という考え方に基づいて起こる感情なのだ。しかしこれらの感覚は全て主観であり、絶対的な「罪」というものは存在しない。そしてそれは絶対的な「許し」というものも存在しないということを意味している。それでも人間は「罪」という概念を捨てることはできず、自分の「罪」を見つめ続けることしかできないのである。

対処法

このイバラツタテンジュにも対処という

概念は存在しない。自分で自分を許すことはできない。しかし他人を許すことはできる。そしていつか「自分」のことを許してくれる存在に出会うことが人間にとって必要なかも知れない。それはきつと「人間」にしかできないのであろうと思う。

